

国内経済情勢

概 観

4月の鉱工業生産は、資本財を中心にかなりの上昇をみた。その背景としては、輸出好調、個人消費の持ち直しに加えて、繰り延べられてきた工事の進捗などがみられる。このように、景気の立ち直りは一段とはっきりしてきた。

企業の先行き強気観も次第に根をおろしているが、当面については、企業の投資態度はなお慎重であり、とくに在庫面でそれが目立っている。資金需要も、総じて落ち着いている。商品市況は鉄鋼を中心に引き続き堅調であるが、それも一本調子ではなく、このところ騰勢は次第に鈍化している。

しかし国際収支面では、輸出は引き続き好調であったが、輸入の水準が高いため、4月は貿易収支でかなりの赤字となった。ここしばらく、基調的にみて、輸出入はますます均衡圏内にとどまるといった状況と思われる。

機械生産の伸び目立つ

鉱工業生産(季節調整済み)は、3月+0.3%と微増のあと、4月は速報で+4.8%と大幅の上昇をみた。月によるフレが大きいので、ならしめてみる必要があるが、それにしても当月の生産はかなり強かったといえる。業種別にみると、鉄鋼、窯業を除き軒並み増加したが、とくに目立つのは、家庭用電気器具の増産と資本財関係、なかんずく自動

車、一般機械の増産である。一般機械には、輸向向け、電力向けの大型機械など特殊なものが含まれているが、その他では、エレベーターなど建設関係のものや合繊向け設備などがふえている。

一方4月の出荷は、前月+2.3%に対し+1.6%と引き続き増加した。耐久消費財が前月大幅伸長のあと減少し、夏物衣料が天候の関係から出遅れているが、その他は軒並みに伸びている。このため、メーカーの製品在庫は4月もかなり減少し、在庫率も低下した。

年明け後における生産や出荷の動きを通観すると、回復テンポはかなり速いといえよう。輸出が好調を続け、個人消費が持ち直してきたことも背景となっているが、自動車の好調、盛んなビル建設もささえとなっている。同時に、このところ電力関係の機械装置の完工が集中していること、引締め下で繰り延べられてきた民間企業の工事が年明け後かなり進捗している点も見落せない。

設備投資は工事ベースでみると、上にみるとおり、当面かなりの水準にあるとみられる。一方、先行きを示す機械受注は引き続き回復をみているが、その伸び方はゆるやかである。3月も、依然自動車、化学、合繊など好調業種からの発注がふえた。なお中小企業でも、新分野の開拓、厚生施設などを中心に、設備投資が次第に強まっているようである。

他方在庫面では、機屋や中小電炉メーカーなど一部を別として、なおさしたる動意がみられない。メーカーの原材料在庫指数も、2月は微増し

たが3月は再び-1.9%と減少しており、1~3月を通じて3.7%の減少となっている。しかも業界では、いまの原材料在庫水準をほぼ適正とみており、大企業を中心に買い控え態度が強い。商品によっては、製品在庫の面でお過剰感が残っており、市況先高感はないという。企業採算もまだあまり好転していない。そうした事情から、企業は在庫管理について慎重な態度を持っているものとみられる。

商品市況、堅調ながら騰勢やや鈍化さみ

最近の商品市況は、鉄鋼を中心に立ち直りを続けているが、騰勢は次第に鈍化しはじめている。

すなわち、鉄鋼は、薄板、山形鋼、軽量形鋼などを中心に小幅続伸をみており、遅れていた非鉄でも、小さなあやはあるが、大勢としては立ち直り傾向が続いている。紙、化学なども、引き続き強含みである。しかしこうしたなかでも、立ち直りの早かったか性ソーダ、合成樹脂などはこのところ騰勢一服模様である。また繊維でも、伸び悩みが次第にはっきりしてきた。毛糸は一高一低のうちに総じて頭打ちとなっており、綿糸布、生糸なども軟化している。

このように、市況立ち直りの中心はこのところ鉄鋼、非鉄などに移りつつある。しかも鉄鋼では、品種によってかなり品薄が目立つに至っており、このため、ある程度操短を緩和して需給の調整をはかる動きが強まってきた。非鉄でも、一部に自主減産を緩和しようとする動きがみられる。操短による市況回復を先決とする業界の態度が、ここで大きく変わるとはみられないが、当面、市況は強含みながらも次第に騰勢を弱めるものとみられる。

4月の本行卸売物価は、鉄鋼、紙などの上昇を

中心に前月比+0.1%となり、5月上旬も鉄鋼を中心に+0.1%と微騰を続けた。4月の小売物価(東京)は、これまで騰勢の中心であった食料品、燃料が下落したが、繊維品の値上がりが大きかったため、全体では、前月比+0.1%となった。消費者物価(東京)は、4月は前月比+1.2%と大幅上昇をみた。これは、生鮮食料品が大幅に値下がりしたにもかかわらず、授業料、理髪代、映画観覧料などの値上がりが大きかったためである。

輸出好調ながら、輸入もかなりの増勢

4月の貿易収支は、輸出は好調を続けたものの、輸入もかなりの増勢を示したため、40百万ドルの大幅赤字となった。貿易外収支も、若干特殊要因も加わって赤字幅が拡大したが、資本取引面が大幅の流入超過となったため、総合では15百万ドルの黒字となった。資本勘定では、インパクト・ローンの流入のほか、輸入増大に伴うユーザンスの増加が目立っており、ユーロ・ダラーは小幅ながら引き続き流出超過となった。

4月の輸出(為替)は、前年同月に比し9%の伸びとなった。通関その他と合わせてみると、輸出はこれまでの頭打ち傾向からいくぶん持ち直してきたとみられる。品目別では、鉄鋼、自動車、船舶、光学機器、化学肥料などが依然好調である。先行きについても、信用状や成約状況などに好転がみられ、米国向けもやや持ち直してきたようである。引き続きかなりの輸出圧力がかかっており、国内市況の回復も、当面は輸出価格の上昇となって有利に働いている状況とみられる。

一方4月の輸入は、為替ペースで前年同月に対し+11.5%と引き続き増勢を示した。昨秋来買い付けの進んだ原綿、原毛、大豆などの着が集中したためであるが、小麦、砂糖などの食料もかな

り高水準であった。また、これまで落ち着いてい
たくず鉄が、電炉メーカーの買い進みから漸増し
ていることが注目される。

しかし、こうした輸入の増勢には、一時的なもの
がある程度含まれている。繊維原料はいまの入
着が一巡すれば、当面余裕含みの在庫となるもの
とみられる。くず鉄の漸増には、内外市況の反騰
も響いており、ごく一部には手当急ぎもきざして
いるが、くず鉄市況も、米国における鉄鋼備蓄の
動きが一巡すればやがて落ち着くとみられている。

輸入の先行きは、在庫の動きよりも、むしろ輸
入関連生産の上昇テンポいかににかかっていると
いえよう。この点については、鉄鋼の操短緩和
と、それにかからむ大手筋のくず鉄手当の動向が注
目される。いま一つ見落せないのは、砂糖、大豆
などの輸入単価が高騰していることである。貿易
収支の基調は、当面、均衡圏に近いところで推移
する状況と思われるが、それだけに、今後の輸入
動向には十分な注意が必要であろう。

資金需要の大勢、なお総じて落ち着き

4月の金融市場をみると、銀行券の増発傾向が
続いたが、財政資金は大幅の払超となった。この
ため、本行の市中に対する債券の売戻しが行なわ
れたにもかかわらず、本行貸出は1,202億円の減
少となり、市場は引き続き平穩裡に推移した。こ
のところ銀行券の基調が強まっているが、その背

景として、所得、消費の持ち直しが次第にはっき
りしてきた。

4月の全国銀行貸出は、236億円の増加となっ
たが含み貸出の関係を調整すれば、むしろかなり
の減少とみられる。これは前月における大幅増加
の反動であり、銀行貸出面にこのような季節的な
動きがみられるようになったのは、資金需要が落
ち着いているためといえよう。当月の貸出内容で
も、電力の増資つなぎ資金の返済とか、鉄鋼の滞
貨資金返済などがあり、とくに大メーカー向け貸
出で落ち着きがみられた。

もっとも最近の資金需要としては、自動車、食
品、家庭用電気器具などで販売資金の増勢が続い
ているほか、商社でも取引増大に伴う資金需要が
ふえつつある。また中小企業の要資もふえている
が、これは労働節約などを旨とする合理化資金が中
心と思われる。

銀行の貸出態度は、引き続き優良取引先の確
保、ないし融資系列の整備などをめぐって積極味
を加えつつある。ここ数ヵ月来、そうした方面へ
の貸出増大を背景として、企業に対する預金通貨
の供給はかなりふえてきた。取引が年明け後次第
に増勢を強めているので、今後決済要資がその面
から除々にふえる気配はあるものの、当面は、企
業の金繰りは依然かなりの緩和基調にあるとみら
れる。